

日本記者クラブ会報

第213号
1987年
11月10日発行

東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
日本プレスセンタービル 100
◎ 社団法人 日本記者クラブ
電話 五〇三一二七二二(代)

総裁候補の三人が会見

ノルウェーの皇太子ご夫妻も

ニューリーダー三人の虚々実々の駆け引きは、結局、中曽根裁定の形で竹下氏の宿願達成に帰したが、一連の話し合い開始直前の十月初めに、クラブは宮・竹・安の順に三人を招き、それぞれ一時間ずつの記者会見を開いて、立候補の弁を聞いた。



竹下登氏の記念署名

のほどがうかがえた。三人ながら意欲十分の競演のわりに、格別の話も聞き出せなかったが、後日の参考のために、サイン帳に書いてもらった三人の筆の跡を記録しておく、宮沢氏は「任重道遠」、竹下氏は「我が道を行く」、安倍氏は「心高志潔」。

過去のサイン帳を繰ってみると、竹下氏は創政会旗揚げ直前の一昨年一月九日に「我が道を行く」、派閥内紛に苦慮していた同年十月二十五日は「竹有上下節」、田中邸門前払い直後の今年一月十六日には「忍」の一字、そして今回十月七日は再び「我が道を行く」である。

この三つの記者会見を柱に、十月のクラブ行事は、土井たか子社会党委員長と澄田日銀総裁の昼食会、ス

中央・地方各紙に掲載された主要記事を集成した『明治ニュース事典』(全八巻と索引)、『大正ニュース事典』(全七巻と索引)を、施設運営委員会の英断で購入、ラウンジ協の書棚に備え付けた。会員諸氏の考案にこたえたもので、大いに活用していただきたい。

施設運営委員会ではまた、当クラブを含めプレスセンター内の店子五者が共同でJCTVのニュース番組を受信することが承認された。ただし、工事の関係で実際に受信できるのは来年七月から。

なお、前号でラウンジ利用の際は、受付で必ず署名していただくようお願いしたが、いまひとつ、会議室などの利用にあたって、名義貸しの類を厳に慎んでいただくよう、併せてお願いする。

貸室についての内規には、会員の申し込みでもその会員自身が出席しない場合、会員社以外の特定団体の事業に使用する場合、営利目的に利用しようとする場合、その他、定款に定めるクラブの目的に反する場合は、お断りする、となっている。

(事務局長 下田 進一)

千葉さん九十歳

「卒寿を祝う会」に出席して

殿木圭一

千葉雄次郎さんが九十歳になった。卒寿のお祝いである。うれしいではないか。うらやましいではないか。

祝宴は十月六日の晩、日本記者ク



祝福をうける千葉会員とまさ子夫人

ラブの宴会場で行われた。古稀だ喜寿だという近ごろざらにあるのと違って、めったにない卒寿のお祝いである。芸者の総あげぐらい何のそのとききたいところだが、それはお客さんのお許しが出まい。出席者は全部千葉さんより年下であらうが、平均年齢はかなり高い。と思っていたら、来年三月東大卒業予定で朝日新聞に入社の決まったという、うら若い女性もいたそうだ。おしなべて知的水準は高い。

当日の演説は、新聞界を代表して朝日の一柳社長、放送界を代表してNHKの川原会長、学界を代表して東京大学新聞研究所の竹内所長、日本エッセイストクラブを代表して春日理事長の四人が、千葉

さんの功績をたたえ長寿を祝った。みんなしゃべり足りない様子だったし、それよりほかにまだ大ぜいの人々が、自分のしゃべる番を期待していたかもしれないが、プレスセンターでは徹夜の宴というわけにもいかなかったであろう。

そういう話を聞きながらふと私は、千葉さんが、前世紀の終わり、明治の世に生をうけて、大正デモクラシー、昭和の大恐慌、十五年戦争、そして戦後の、さて何と言ったら一番ピンとくるか知らない新しい時代を通して、九十年をどんなに苦勞して生き抜いて来たかと思った。いや、そんなことを思う前に、思わず涙がこぼれそうになった。千葉さんだって感無量だったろう。あいつの声にはいつもと違う張りがあつた。マイクもよかったかもしれないが、音吐朗々といつてもいい力がこもっていた。

何も長生きしたからといって、それだけでえらいとは思わない。老人はまま、社会のスピードにブレーキをかけ、発展を阻止したり、ゆがめたりする。しかし時にはその人が地球の上存在しているということだ

けで、はげまされ、力づけられる。そういう人もいる。それ以上は言わなくても、言わんとするところは分かっただけである。

非常に愉快な晩であった。千葉さんも楽しかったろうが、私たちもうれしかった。もう一回と言いたいくところだが、そういうわけにもいかない。この上は千葉さんが百寿か百寿かなになるまで待とう。それにはみんな加餐自重しなくてはならない。しかしその結果、卒寿が折り重なって現れたのでは、休む間なしということになりかねない。

とのき けいいち会員 同盟・共同通信を経て 東大新聞研究所長 日本新聞学会会長 現在文芸大学教授

千葉会員は明治三十一年九月二十三日生まれ。朝日のロンドン特派員、整理部長、南方局長、編集総長を務めた後、東大新聞研究所長、NHK経営委員長、日本新聞学会会長など歴任。放送文化賞、新聞文化賞受賞。昭和五十六年から日本記者クラブ名誉会員。昭和四十七年に著書「知る権利―現代の新聞自由」の出版を機に、自由で責任あるジャーナリズムの奨励のためクラブへ百万円を寄託。これを基金にして、「日本記者クラブ賞」が創設された。

当日は、新井理事長、渡辺、高田元理事長ら関係者一三人が出席した。

昭和63年度「日本記者クラブ賞」の

候補者をご推薦願います

◇取材、報道、評論活動などを通じて、ジャーナリストとして顕著な業績をあげ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を、一月三十日(土)までに候補としてご推薦ください。

「選考基準」

- (1) 現役ジャーナリスト個人に与えられる賞である。(現役という意味は現に活動しているということ)で、故人は対象としない)
 - (2) 活動が長期にわたるといふ意味での「敬老賞」でもなく、日の当たらない困難なところで活動しているという意味での「風雪賞」でもない。
 - (3) スターブ賞ではなく、特に最近数年間の業績が顕著であることが重視される。
 - (4) その存在および業績がジャーナリズムの活性化と成熟にインパクトを与えるような個人を顕彰する。
- ◇会員およびプレス会員社に属する方が候補有資格者です。

◇これまでの受賞者は、長崎新聞・松浦直治氏(49年度)、東京放送・古谷綱正氏(50年度)、毎日新聞・松岡英夫氏と日本テレビ・池松俊雄氏(51年度)、朝日イブニング・芝均平氏と日本放送協会・磯村尚徳氏(52年度)、朝日新聞・松山幸雄氏(53年度)、熊本日新聞・岩下雄二氏(54年度)、朝日新聞・疋田桂一郎氏(55年度)、読売新聞・村尾清一氏(56年度)、東京新聞・須田榮氏(57年度)、共同通信・斎藤茂男氏(58年度)、毎日新聞・増田れい子氏と日本映像記録センター・牛山純一氏(59年度)、日本放送協会・岡村和夫氏(61年度)、朝日新聞・大谷健氏と毎日新聞・吉野正弘氏(62年度)の方々です。

◇推薦者は、所定用紙に候補の氏名、略歴等を記入し、四百字づつ原稿用紙五枚以内に推薦理由をまとめ、参考資料を添えて事務局へ提出願います。

◇不明の点は、事務局(五〇三)二七二二へお問い合わせください。

■会議報告

第149回企画委員会(10・5 大会議室)

司会をした委員からの行事報告の後、クラブゲストの選考について協議した。東京港、横浜港に続き、千葉港の見学会実施の可能性について検討することにした。

出席 細谷委員長。浅井、阿部、友田、佐藤、高橋、久木、武藤、浅野、河野、林、平田、堤、有馬の各委員。

第42回施設運営委員会

(10・12 第2会議室)

来年七月からのJCTVのCNN二十四時間ニュースの受信を決めた。大会議室、記者会見室の壁紙張り換え工事の見積もりを事務局から報告、これを了承した。国公賓ゲストなどのカラー写真を記者会見室の壁面にも飾ることにした。

出席 犬養委員長。後藤、佐川、和田、小松原、宮地、甲斐原、野田の各委員。

第85回会報委員会(10・12 第2会議室)

十月号の編集について協議した後、明年一月号の『新春随想』を福田利光氏に依頼することを決めた。また明年の『写真回廊』短文執筆者について意見を交換、次回委員会で決めることにした。

出席 深川委員長。松井、東郷の各委員。

第122回会員資格委員会(10・13 第2会議室)

十月一口付の会員入退会を審議し、理事会へ答申した。

出席 渡辺委員長。松下、小池、播谷、樋口、金子、山本、青木、亀垣、椋邑、長竹の各委員。

寄贈書

NHK年鑑'87 日本放送協会

ワシントン・ポスト 記者ハンドブック

BERLIN ジャパンタイムズ

THE 1980S: MEETING A NEW 西ドイツ大使館

CHALLENGE 韓国大使館

Japanese Senior 博報堂

電気通信大学学報 電気通信大学

展覧会の招待券

朝日新聞社から「備前・藤原雄自選展」の招待券をご恵贈いただきました。お礼申し上げます。

▼「ベスト・カート」

▼南西アジア

地域記者研修

参加者五名(9・20~10・17)▼アフリカ地域記者研修参加者三名(9・20~10・17)▼カリブ海地域記者研修参加者一名(9・20~10・17)▼第五回中南米記者研修参加者八名(10・26~11・21) Ⅱ
フォーリン・プレスセンター

とっておきの話

吉田内閣の退陣



宮崎 吉政

田首相に同行した各社の特派員電報は、「吉田首相、帰国後なお政権担当の意向」などと伝えていた。しかし、自由党内でも緒方副総理、大野総務会長らが「帰国後引退」の見通しを

郎。副総裁重光葵、幹事長岸信介、総務会長三木武吉、政調会長長村謙三、最高委員芦田均、石橋湛山、大麻唯男ら。衆院百二十一名、参院十八名。これにより野党連合勢力は、衆院の半数を越え、倒閣の頭数をそろえるにいたった。

解散か総辞職か

つけていた。

十一月八日、業を煮やした池田幹事長は石橋、岸両氏を除名したため、新党への歩みは一層進展する。十五日、新党創立委員会が発足。二十三日には改進黨、日自両党の解党と、鳩山・岸両派の集団脱党が予定された。

帰国した吉田首相は二十二日、「しばらくは小生一身の進退を度外視し、いかに善処すべきか熟慮を相わずらわしたい」との、吉田書簡を自由党に送った。しかし、これより三十分前、鳩山氏ら衆院三十五名、参院二名の離党届が提出されていた。

二十四日、日比谷公会堂で「日本民主党結成大会」。総裁鳩山一

一九五四年十二月、吉田内閣が退陣するまでの一か月くらい、新聞記者として緊張し、したがってこれほど、私が記者冥加につきる思いをした時期はなかったようである。

この年は正月以来、保全経済事件、造船汚職、乱闘国会、指揮権発動などによって、吉田内閣は危機的様相を呈していたが、このなかで党内鳩山派、改進黨および日本自由党による新党運動が急ピッチで進められた。

「日本民主党」の結成

十四号台風が一過、まぶしいばかり晴れた九月十九日、日曜日と

いうのに、音羽の鳩山邸は終日人の渦巻きのなかにあった。この夕方から、鳩山・重光会談が石橋、岸、三木(武吉)、松村氏ら同席のもとに開かれ、「反吉田新党の結成」を申し合わせた。新党参加の議員が、二百名ほどの新聞記者と芝生に座り込んで氣勢をあげた。この中には、中曾根康弘、福田赳夫氏らもいた。

新党準備会の看板をかかげた永田町のグランドホテルが終日にぎわっているなかで、吉田首相は欧米七か国訪問の途についていたが、新党運動は進捗し、十一月二十四日の結成大会が予定されるにいたった。

この間、タキシードを携えて吉

この夏は、政界はもとより、新聞記者にも休暇らしい休暇はなかつた。政変―解散必至とみられ、政治部会では「解散か、吉田退陣か」が焦点になっていた。吉田書簡の出た夜、小島政治部長(故人)から「これはどういう意味か」と

きかれた私は即座に、「吉田引退」と言い切ったが、同僚の多くは「吉田統投―解散をも辞せず」の見方をとっていた。

首相はきわめて強気で、二十六日、自由党総務会は一後継総裁は緒方竹虎とする。吉田内閣で解散、緒方総裁で選挙」の方針を決定した。

十一月三十日、第二十臨時国会

召集。十二月一日、松村謙三氏（民主）の質問に対する首相の答弁は、きわめて高姿勢である。聴くものはひとしく「解散の気構え」と断定したが、私のみはむしろ「吉田下野」とした。首相の個人的判断ではなく、与党内の力関係にあるとみたからである。

当時私は取材の重点を、緒方副総理と池田幹事長およびその側近に据えていた。緒方氏には追放中から知己をえており、高橋円三郎、長谷川峻氏らとも古い親交があった。また、池田氏は大蔵省時代から親しく、前尾、愛知、宮沢氏らも長いつき合いである。

緒方氏が、党人派の中心として強く総辞職を主張しているのに対し、池田氏は解散強行の立場をとりながらも、一方では吉田氏の晩節を全うさせるため、円満な引退をあれこれ模索していたようであった。十二月三日、池田氏の誕生日の夜、飲みながら「西郷、勝の会談のようにといわれるが、相手の西郷が小さすぎるからね」と、評したのが鮮かに思い出される。

緒方氏は「吉田内閣で解散」が決まった後も、「首相の言は原則論だ」と鷹揚に構えていた。十二月五日の日曜、終日、参院予算委員会にあって緒方氏は、午後十一時頃「明日から始まるが、まあ、僕の言う通りになるよ」と、余裕綽々の態であった。

六日、野党三派は不信任案を提出、七日上程の運びとなった。むろん、成立は確実である。

この日午後、「ラジオ九州」の鼎談に出た橋本博（毎日、後東京放送副社長）、和田教美（朝日、現参院議員）の両氏は「解散必至」をとまえ、私のみ「総辞職」と言明した。

間違ったらやめる覚悟

六日の夜七時半、緊迫した空気のなかで政府・与党首脳会議が開かれた。寒月冴える首相官邸の出入りは慌ただしさをきわめ、秘書官室は、下野論者であふれた。そんな中でたまたま「ラジオ東京」のマイクをつきつけられた私は、

「明日、総辞職」と言明した。奇妙なことに、私までが背水の陣になっていた。

この間吉田首相は、芝白金の公邸で、緒方、池田氏らと個別に会談したが、緒方氏は諄々と世論や党内の動向を説き、「総理がどうしても解散するなら、私は格好の悪い西郷南洲となるかもしれません」と語ったという。

結論は翌日に延ばされたが、所詮は吉田氏対緒方氏らの力関係である。デスクには「解散断行」の情報相次いだ。私は「緒方は立候補をやめるようだ」「緒方は解散詔書に署名しない、と高橋円三郎が言っている」などの情報をデスクに送った後、どこかをうろつきまわり二時ごろ帰宅した。もうどうでもいい、間違ったら記者をやめようと、なかなか眠られなかった、と当時の日記に記してある。

翌七日の朝刊では、読売新聞のみが、「きょう吉田内閣総辞職」と報じている。部長、デスクの総合判断だと思うが、私の情報もと

り上げられていた。早々と、国会記者会館に赴いた私の心中は、穏やかではなかった。首相の巻き返し、逆転を予想する空気も出ていたからである。あるデスクは「君がこんなことを言うから」と恨み顔であった。

この朝八時すぎから芝白金の公邸で、閣議と政府・与党首脳会議が続いた。私にとっては息詰まる思いの数時間であった。そして一時三十七分、福永官房長官が、総辞職の通告を行った。この直後、がらんとした衆院本会議場の記者席で、NTVのマイクに臨んだ私は、一休何を言ったことか、全く覚えていない。

みやさき よしまさ会員 大正四年札幌市出身。早稲田大学政経学部卒。昭和十五年読売新聞入社。経済部、政治部記者を経て、論評委員。四十五年退社。政治評論家。

自民党総裁選

ワーキングプレス

87政権交代劇がヤマを越えた。現職首相が余力を残しながら任期切れ退陣したのが異例なら、安竹宮の後継候補がだれも前任者を批判せず、口をそろえて路線継承を唱えたのも異例。候補者たちが後継指名を無条件で「首相裁定」に一任し、中曽根氏の胸三寸で後継総裁は竹下氏と決まった幕切れも異例、という異例づくめの自民党総裁選だった。

「どうも緊迫感が感じられなくて……」「なんか締まらないう政局なんだな」

総裁レースが本格化したこの春以来、最前線で取材する平河クラブや官邸クラブの仲間たちから、何度そんなぼやきを聞いたことだろう。「締まらない」

理由はいろいろあったかもしれない。が、最大の要因はやはり三人の候補者にあった。

安竹宮三氏が、中曽根政治を総括したうえで、なぜ自分がいま政権に就かなければならないか、政権を担当したら何を手掛けるか、を気迫を込めて語ることはほとんどなかった。「怨念」など残そう

として残すべきものでないのは確かだし、「政権は闘いとるものだ」と必要以上に肩をいからせるのも今様々ではないのかもしれない。それにしても、次期首相候補ともあろう人たちの口から、「自民党政治である限り、だれが総理総裁になっても、そう変わるものではない」(竹下氏)とことまなげに語られるたびに、天を仰ぎたい気持ちにかられた。

「政治面」も問われた

野村 彰 男

永田町の空気がそんなではあった。新聞の政治面は当然のことながら永田町の町内誌や政界という限られた社会の業界誌ではない。

候補者たちがどんな人物で、どんなビジョンを持ち、実行能力を備えているかを知りたい読者の要請に、どうこたえていくかは今回の総裁選を通じて、おそらく各紙の政治部が一番苦心し、悩みもし

たところではないかと思う。そんな沈滞にいつとき喝を入れたのが、十月十六日で七十八歳になった二階堂前副総裁の出馬表明だった、というのも皮肉だった。

大詰めが近づくにつれ、ひどく多くなった夜の会合の取材や紙面化にも悩まされた。候補者や派閥幹部による肝心な会合ほど潜行する。各派閥とも集団指導体制の性格を強めているから、勢い密着取材の対象はふえる一方

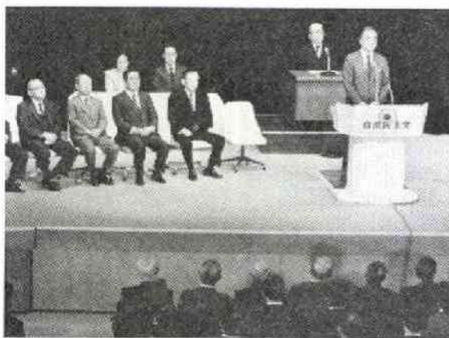
だ。他方、各派から五人も十人も繰り出しているこれみよがしの派閥間会合

には、それほど意味があると思われないものも多し。にもかかわらず、担当者として不安につきまといわれるから無視してかかるわけにもいかない。

多くのエネルギーを費す結果が、必ずしも読者の関心にこたえる記事につながらない、という政局取材のジレンマからどうしたら抜け出せるか。密室政治の是非論とは別に、この問いかけも、答えを見いだせないまま、頭にちらつ

いた。

首相の調整が焦点となった終盤は、「意中の人」をめぐる情報戦に彩られた。本人はにんまり口を閉ざす中で、各陣営も取材側も、あれこれの周辺情報に振り回された。かつて首相公選論の主唱者で、在任中は大統領的首相であることを目指し、「永田町の論理」を批判した人がたった一人であり、事実上の次期首相を決め、「早くも元老気分」といわれていることに、今回の政権交代劇の奇妙さが集約されているように思えてならない。



内閣議員総会で竹下氏指名を説明する中曽根首相(10.20) 写真 朝日新聞

のむら あきお 一九六七年朝日新聞入社 甲府支局 札幌報道部を経て七〇年政治部 今年二月から官邸クラブキャップ

王 監督番

ワーキングプレス

王監督は自分のことを「オレが」と言う。ところが活字になる「ボクが」となっている。長い間蓄積された優等生イメージがあり、われわれが勝手に「ボク」にしてしまうのである。昨年のオフ、王さんから依頼があった。「言ってる通りに書いてくれ。オレはいつもオレと言ってるじゃないか」。その当時、それがどういう意味か分からなかったが、今年になって理解できた。「自分のやり方でやる。自分自身を出していく」。進退をかけるシーズンを前に決意したことのスタートが、「ボク」を「オレ」に変えさせることだったのだらう。

自分のやり方で勝った。開幕投手が江川でなく、西本というのがそうだったし、角、鹿取、サンチエリの継投ワンパターン、原に7番を打たせたことなど、すべて評論家やネット裏関係者の批評に耳を傾けず、王流を貫いた結果であった。周囲の意見などどうでもいい、優等生イメージをかなぐり捨てたうでの勝利で、これからも

どんどん本来の姿を見せていくと思うのだ。

王番は各社とも東京・中根の自宅に、昼近く集まり、王監督自ら運転するベンツに同乗させてもらって球場入りする。渡滞にイラ立つ。「バカ野郎、割り込みすんな。ナニしてんだ」と、まるでトラックの運ちゃんなのだ。カセットはド演歌。「兄弟船は、オヤジの宝」と怒鳴る。優雅なマイ

こんなに違う実像と虚像

川手洋一

ウェイの曲、一本ヤリというイメージはだれがつくったんだろう。王さん自身「なんでそうなったか分からん。オレは下町(東京・墨田区)育ちだからド演歌だよ」と言う。ときおり女性にも目がいつて「オッかわいいい娘だね、(エー)ってなことも言う。

取材に対する時のイメージはもつと違う。あしたの先発投手は？などとときくと、ヒントを与えてか

ら、「よし、それを一面でバーンと書いてみる、勝負してみろ」などとあおる。そして、実際にその通り書いたら、「キミはたぶんクビになる。辞表を書いた方がいいぞ」などとまじめな顔でおどかしたりする。取材のかけひきが大好きで「サァー、このヒントで当ててみる、面白いなあ」などと、いつも自分で楽しんでいるのだ。グラウンドだけで理路整然と質問する

記者には適当に答えて、結局は足を運ぶ記者を大事にする。情やハートを大切にすると人というものが王番の定評だ。

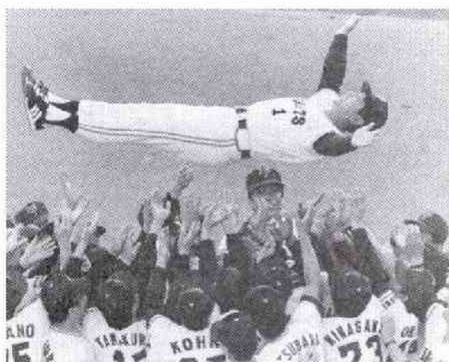
これだけ実物と違うイメージで固められた人というのも珍しい。ひとつには本人も「あれがいけない」と言うように、テレビにピンチで映る眉の間のシワがある。「オレはこれだけあけっぴろげな男なのに、あの顔でえらく思慮深く慎重なイメージになっちゃうんだなあ」と嘆いている。もうひとつは常に対比されてきた長島さんに、型破りなイメージが先についたため、それに対する存

在として、いつも優等生でかためられてしまったのだ。王さん自身、それでしょうがない、と思っていたフンがある。

周囲に合わせず、自分を出して勝った王さんは、これからさらに既成のイメージを取り除いていくはずだ。「国民栄誉賞がハク奪されてしまうかもしれないよ」と本人は言うが、取材する立場からいうと、車の中の王さんがそのまま出てきた方が面白い。

〔十月二十六日記〕

かわで よういち 一九七五年報知新聞入社 七年からプロ野球記者 八三年から巨人を担当



4年目でリーグ初優勝 (10.18) 後楽園 写真 報知新聞

多様化してきた 外国人記者の関心

安 延 久 夫

一九七六年十月に財団法人フォーリン・プレス・センターが設立されてから十一年、その存在は各国のジャーナリストの間はかなり定着した。常駐を除いて短期間に来日する外国報道関係者は、テレビチームを含めると、昨年は年間約三四八人。取材協力件数は二千件を越えた。しかし、正確な数はつかみにくい。

これら報道関係者の取材協力要請事項もまた、年とともに変化した。

一口に言うと、飛び込みで来る米人ジャーナリストの関心は、日本の経済、テクノロジーの発展に焦点を当てていたところと違い、その背後にある発展の原動力、文化、伝統、教育、および排他主義、グループ指向を含む社会構造など、取材対象を「人間」にしぼる傾向が強まっている。

それに対し、フランスをはじめ欧州のジャーナリストはフジヤマ、ゲイシャにはじまる当初の上すべりの異国情緒趣味

から、真面目な日本の文化や伝統の取材を経て、現今では経済発展、テクノロジーの進歩の現状を改めて見直す傾向が強い。欧州はこの点で日本の産業力の進展を、はじめは軽視していたのではないかと、ふと思う時がある。

EC諸国のジャーナリストは、日本の経済が世界経済に占める地位と、今後の影響力に重大な関心を持ち、とくにフランスの記者の中には——日本では考えられないことだが——日本の軍需産業がフランスのそれをおよびやかさないかとの懸念をいだくものもある。また、日本の投資については、歓迎と警戒の入り交じった態度をみせるものもある。

要するに、停滞気味の先進国の中で、いぜん大きなポテンシャルティを将来に持つ国という日本のイメージが、訪日する世界のジャーナリストの取材対象を多様化かつ深層化している、と思われる。

フォーリン・プレス・センターは、こ

のほかに招待記者として年間平均八、九人の欧米ジャーナリストを訪日させているが、これらの記者は、特定分野を取材対象として来日するため、経済摩擦がホット・トピックの時でも、全くそれにふれず文化専門を追いかけるといふこともある。

では、このような様々な記者の取材要望に対する日本側の対応はというと、やはりハイテク、とくにバイオ関係の企業や、あるいはダンピング問題で矢面に立たされた企業などは、外人記者に対して防衛的である。自社の対応が日本を代表していると思われることへの憂慮、また対応が米国で巻き起こすであろう反響を考慮して、慎重に取材を断るといふケースが多い。

防衛問題の取材は経済に次いで増えているが、今後微妙な問題が、ハイテクの問題も含めて次第に増えてくるにつれて、取材の壁は当然厚くなる。また、円高で不況にあえぐ中小企業、造船なども取材に対して極めて消極的である。

さらに、フォーリン・プレス・センターは、第三世界の記者を対象にした記者研修計画を実施している。これは三十五歳以下の中堅記者を招待して、日本の各分野を一層理解してもらおうためのものがあるが、取材希望で不変なのは広島、長崎の原爆地取材とテクノロジー、経済協力の

問題である。

彼らのうち、先進諸国に招待された記者の比較論が印象的だ。米国はナショナル・ポリシイについては極めて強い立場を取り、反論すると、記者の方が間違っているとして絶対譲らない。英国は少し融通性があるが、両国とも彼らを見下したところを感ずるといふ。この点日本は柳に風といった感じで、平等にはみえてくれないが、一本筋が通っていない、というのである。

彼らが広島や長崎を見たあとの質問は決まって、「あんなに非人道的な兵器で数十万人の日本人が殺されたのに、日本国民に対米憎悪感が見られないのはなぜか」というものである。とくに復讐を美德とするアラブ世界の記者からは、今年も執ように回答を迫られた。

自身も被爆者の一人である広島市の川本原爆平和記念館館長は「例外はあったが、おしなべて米占領軍が見せた微笑と優しさが憎悪感を抱かせなかった一つの大きな原因」と答えていた。そういえば、日本の右翼にも左翼にも、さらには戦争の記憶の風化を戒める日本の新聞の論調にも対米憎悪感はない。

やすのべ ひさお 会員 一九五〇年毎日新聞入社 外信部 カイロ支局長 編集委員などを経て 七七年退社 七八年からフォーリン・プレス・センター勤務

スタジオ訪問

東京放送

『ニュース22・プライムタイム』

報道の総力を 結集して

方の「ジャブ」の応酬への期待もあって、私同様急がしくチャネル・チェンジをしていた人も多かったのではないだろうか。

十月二十一日、スタートして二週間余り。まだまだ試行錯誤中。「アチラを意識しないわけではないが、報道のTBSらしい堅実な番組にしていきたい」と植田豊喜プロデューサーは語る。しかし、スタート当初は「大ニュースが少なく、軟派ものが多くなり、ソフトな編集になってしまった」と。

夜十時のニュース戦争——話題豊富な在京各局の秋の番組改編の中でも、特に注目を集めたのが、TBSの『ニュース22・プライムタイム』（月・金、夜10・54）だ。安定した視聴率で独走していたテレビ朝日『ニュースステーション』の挑戦である。

十月五日の初日。『プライム』はスタジオに、リーグ優勝目前の巨人・王監督を迎え、森本毅郎キャスターがインタビュ。王監督から「来年もやります」という言葉を引き出した。かたや『ステーション』は、久米宏キャスターが「今日は非常に力が入りそうですが」と切り出したものの、普段と変わりのない軽妙なしゃべりで余裕十分の様子だった。この日の視聴率は一〇%対一二・八%。『ステーション』が先発番組の貫録をみせたが、ニュース好きの視聴者の中には、両

番組の構成は、その日のメインニュースの掘り下げと企画もの、それにスポーツとフラッシュニュースが基本になる。そして「分かりやすく」ということに力点を置いている。また生中継を多く取り入れ、海外支局からのリポートもなるべくナマで使う方針だと言う。「TBSの報道で欠けていた点は、分かりやすさだ」と思う。そこで、記者リポートもVTRではなく、記者自身がナマで森本キャスターと話し合い、その話を通して内容を深めていくようにしたい。

視聴者の最も関心のあるニュースをより早く正確に分かりやすく、というのは、各局のどの報道番組にも共通することだろう。しかし「TBSらしい番組づく

くりをしていけば、結果として『ステーション』とも『NC9』とも違ってくるはず」と植田さんは言う。「ウチらしいオーソドックスな作り方の中で、森本さんのパーソナリティを生かし、生活に根ざしたニュースをとり上げていきたい」。

が、いまのところ『プライムタイム』の顔、森本キャスターの番組に対する自己採点はきびしい。「まだ番組の形が整っていない。色合いを定めきれいでいませんでね。僕はもつとビビッドにやっていたいのですが」と語る。

どの番組もそうだろうが、船出直後は不安定だが、スタッフにとっては一番生き生きとした時期かもしれない。森本さんも高揚しているのだから、次々と語録が飛び出した。▽ニュースのうすい時にこそ、どういふ番組づくりをするかが重要だ▽みんなが本当に求めている情報をかぎわけるのが僕らの商売で、価値ある情報を価値のある時に伝えなければ意味がない▽「現状」を興味をもって見てもらえるようにアイデアを出す。これも僕らの責任だ▽送り手本位で、内向きの番組づくりはキライだ▽ニュース的娯楽番組ではなく、もつと真面目でシビアな番組にしていきたい等々。

番組のもうひとつの顔は、コメンテーターの嵐信彦さん。毎日新聞を七月に退

社した。経済記者としての経験を生かして番組を活性化させるのが役割のようで、「彼の毒のあるホンネ」をもつと打ち出していきたい」と植田さんは言う。嵐さん自身は「新聞とテレビでは同じ報道といっても、方法論も処理の仕方もあるで違う。まだ暗中模索しているが、情報過多の世の中で本当のシナリオを示していけるようなコメントをしていきたい」と語る。

『プライムタイム』の専任スタッフは二十三人。外部のディレクターや技術スタッフを加えると四十人を越える。そして海外支局十五、JNN系二十五局の報道スタッフが一九となつて番組をつくっている。来年からはもう一局夜十時台に挑んでくるという話もあるが、当面は三年先行の久米キャスターをならみながらの総力戦になりそうだ。（長谷川和子）



「生活も朝型から夜型に一変しました」森本キャスター（中央）と嵐さん（右）

ク ラ ブ ゲ ス ト



アンソニー・ザルム外国法弁護士

モノ、カネ、ヒトの順でやってきた自由化の波。昨年五月外弁法が成立、今年四月に発効、三人の米国人

「外国法事務所弁護士」が誕生した。日弁連への登録手続き等を経て、六月四日、ザルム氏は事務所をオープンした。十九歳の時に一年留学し、ハーバード・ロー・スクールを出た後三年余り、日本の法律事務所勤務した。通訳は不要。

①外弁法の評価②同法成立までの経緯③日本人と米国人の法律問題に対する態度の相違について話した。

「訴訟案件ではなく、会社顧問、交渉代理、契約書作成を狙っての進出なので、法廷に立てないことは制約にはなりません」と。外弁法にはほぼ満足の様子。問題があるとすれば「それは経済的障害です」。東京でのオフィス賃貸料、住宅費、秘書の給与など諸経費がケタはずれに高いことを嘆く。「オフィスを探すと自体が大変なんです」。「二〇月五日(月) 研究会「日米関係」シリーズ(八) 司会 阿部義正委員 出席 四五人」

土井たか子 社会党委員長



「中曽根さんには売上税一つをとってみても退陣に価する重大な失政があった。本来、あの時、内閣崩壊に追い込んでいなければならなかった」。

①公約違反の売上税問題をめぐっての混乱②民話路線に関連しての国有地売却から引火した地価高騰③デタント志向の国際潮流にとり残され、日米、日中、日ソの対外関係をギクシャクさせ、日本の孤立化を深めた責任——などを指摘した。「与党の党則に従い静かに引退」を迎えるのを見るのは口惜しくてなりません。

ポスト中曽根の新政権下での政局への対応については、①臨時国会で土地問題特別委員会の設置をもとめ、地価対策についての集中審議を要求する②新政権は早期に国民の信を問うべきなので、次期通常国会で解散に追い込みたい——と。が、やはり委員長の正念場は党改革問題への取り組みであろう。女性票や浮動票を上積みして、一度国政レベルの選挙で勝利してから、本格的にこの問題に入るのが得策であろうが、そういくかどうか。この日も「全党論議を大事にし、時間をかけていきたい」として、党大会の

年内開催にこだわらず二月への延期を示唆した。記念署名は「生きているすべての人とふれあって、心あたため生きたいものを」。【二〇月六日(火) 昼食会 司会 有馬真喜子委員 出席 一〇三人】

サディク・エル・マハディ スーダン首相



スーダンの首相が日本を訪問するのは初めて。祖父のモハメッド・マハドは、マハディと称され、当時のイギリス、エジプト支配に対し

て戦いを挑み、一八八五年英軍を破り、独立をもたらし。首相としては、ヌメイニ前軍事政権下で混乱し、その後も低迷を続けているスーダン経済を、いかに発展させるかが課題。日本側は、マハディ(イスラム教の救世主)の名を有し、米ソともパイプを持ち非同盟外交を展開する、首相の湾岸諸国への影響力に関心が?

イ・イ戦争を終わらしたい知恵はないか?との質問には「安保理決議が基本的には受け入れられるべきと考える。紛争責任を認定する委員会の構成を公平なものにし、審議期間を特定できれば停戦への可能性も」。【二〇月二三日(火) 記者会見 司会 佐野真委員 通訳 土井真一 出席 四三人】

ハラルド、ソーニャ ノルウェー皇太子ご夫妻



「スカンジナビア・ツディ」のための来日。皇太子のヨット好きは有名である。九月に西ドイツのキールで行われた大会で、一トン級で優勝、国中を湧かせた。東京五輪では同国の旗手をつとめた。ソウル五輪にも出場予定。

何があなたをヨットにひきつけるのですか? 「競争が好きなのです。それに、生まれた時から皇太子なので、海と風にかこまれたところへ行くと、人と人との差がなくなるのも魅力だった。父もヨットが好きだったし」。イブセンの「人形の家」は日本の女性解放に大きな影響を与えたが、いまのノルウェーの女性の地位はいかがですか? ソーニャ妃が次のように答えた。「ノラの心(独立心)はいまもすべてのノルウェー女性の中に生きています。一

ク ラ ブ ゲ ス ト

自民党総裁候補連続記者会見



「日本記者クラブでは次期総裁を日さず方々を逐次クラブゲストとしてお招きして、政治信条・哲学、歴史認識などとともに、内政、外交の基本政策をうかがいたいと存じます。当クラブの昼食会が、政権構想発表の場となり、そこで重要課題への大筋での取り組み方が公開され、候補者間の建設的な政策論争を促すことに貢献できれば幸いと考えております」(六月二十五日付公式発信文書から)

安倍、竹下、宮沢、二階堂の諸氏に、このようなお願いをしていたが、なかなか実現せず、結局、十月八日の告示日をはさんでの連続記者会見になった。順番は次の通り。宮沢喜一蔵相(六日火) 司会 細谷洋一企画委員長 出席 一八三人 竹下登幹事長(七日水) 司会 細谷洋一金画委員長 出席 二一人 安倍晋太郎総務会長(九日

(金) 司会 山岸一平委員 出席 一五三人

三候補とも立派に印刷された政権構想や基本政策を大量に持ち込んだ。正直言って、これだけの材料があるなら、せめてもう一か月前にこの種の会合に応じてもらえればという感じであった。すでに三人とも自派の議員の前で政権構想を発表し、平河クラブ等との会見も終えてはいたが、三会見ともセキを切ったような独特の緊迫感と興奮があった。宮沢氏が珍しく顔を紅潮させ、竹下氏も相当緊張していた。安倍氏だけが伸び伸びと割り切っているように見えた。

三者とも各社の個別取材や外人記者クラブでの会見にも応じていたので、新鮮味のある話の出なかつた。が、石川真澄会員が、三人それぞれに次期首相としての見識の一端をうかがう質問を発し、連続会見を引き締めたものにしてくれた。(十月十一日付「朝日新聞」朝刊に署名記事)

八人中八人が女性閣僚です。チャンスさえ与えられれば女性は伸びます」。(二〇月一三日(火) 記者会見 司会 細谷洋一金画委員長 通訳 チャーリー・グリーング 出席 四三人)

あろう。その意味でも、日銀としてはより物価に重点を置いた慎重なスタンスが必要になる」と。(二〇月二十四日(水) 昼食会 司会 広瀬二郎委員 出席 一〇七人)

澄田 智 日本銀行総裁 「毎年、節目節目の時にうまい具合においでいただいています。去年は円高不況のなかでしたが、一年で経済・金融情勢が大きく変わり、インフレの心配、金利引き上げへの関心が出てきて、大蔵とは微妙かつ深刻な立場の違いがあるようですが(笑)」(司会者)

大崎本一 東京都都市計画局長 大部の資料を用意し、東京都心ならびに周辺部の地価急騰の現況と都としての対応を説明したが、率直に言って迫力がない。東京というケタはずれの怪物がだす経済的エネルギーの前で、都は果たして何をなし得るのだろうか。

まずIMF・世銀総会の報告から。①ルーブル合意にもとづく各国の政策協調が得られ、それを通じて為替相場も落ち着いてきた②米国経済は内需から外需へシフトし始め、日本の内需拡大が進み欧州も明るさを増し、望ましい形で景気が回復している、との評価が目立った。③「そうした中で、持続的成長を維持するためのインフレ再燃防止が、ベーカー演説でも強調された」。

ただ、ここでは都市づくり推進関係の子算額と関係の数字だけを記すにとどめる。六十年年度通常予算で八、二二七億円、九月の補正で八四三億円を追加。幅四〇メートル、長さ一キロの道路の整備費が八三四億円、日比谷公園規模の公園の整備には六〇二億円、中小河川の治水安全達成率を一%あげるのに一三一億円、下水道普及率を一%アップするのに一、二八五億円が必要とのこと。これらは予算編成時の数字だという。地価高騰は都市基盤整備にも深刻な影響を。(二〇月一九日(月) 研究会「土地を考える」II 司会 平田真巳委員 出席 三九人)



国内景気は「すでにかなり腰の強い自律的拡大基調にある」として、「公共事業費、減税が下期に効いてくるので、海外から大きな波乱がないかぎり、内需主導で拡大を続けるで



導で拡大を続けるで

ク ラ ブ ゲ ス ト

大沢弘之 宇宙開発事業団理事長



「十月四日はスペース・トニクが三十周年でした。すでに三月までで三、五三六個以上の衛星が上がりていま

す。日本も八月二十七日の、きく5号で三九個目です。打ち上げロケットH-1は液体水素燃料を使う初の三段式で、五年後には改良型のH-IIで二トン級(きく5号の四倍)の実用衛星を上げる予定です(司会者)。
液体水素燃料のスペースシャトル、アリアンヌがいずれもトラブル続きのところへ、日本がH-1をすんなり成功させたので、「開発中のH-IIロケットがいつ商業化するのか」が諸外国の関心に。理事長は、主要国と比較してのわが国の技術水準と、「有人問題」への取り組みの重要性を語った。

H-IIロケットは基本設計も主要部品も自前の完全国産、軍事機密の關係で外国が外に出さない技術を、自主開発するのに苦労したようだ。が、商業化となると、コストや性能だけでなく、平和目的と軍事目的をどう判定するか、打ち上げ基地

(現在、種子島では漁業補償の關係で二月と八月九月に打ち上げ期間限定)などの問題も。「二〇月二日(水) 研究会「宇宙開発のフロンティア」 司会 堤佳辰委員 出席 三七人」
I・ストールバーグ 全米州議会連合会 会長

コネチカット州の下院議長でもある。同会は、全米七、五〇〇人の州議員とそのスタッフ二万人からなる。シジャパン・スタディ・ツアーを昨年からはじめた。昨年のテーマは「教育」で、今年は「国際貿易」。一行一五人の団長として来日した。十月十六日から約二週間、各省庁の担当者のほか民間企業幹部とも懇談、つくば研究学園都市や工場見学などを行い、大阪、名古屋、長崎を訪問した。

「一般的な米国人は、教育に関する日本人の意識の高さや、戦後復興と近代化の実現に対して、高い評価を与えているが、大統領選の年は、雇用が焦点になるので、農業や石油への依存度の高い地域では、シジャパン・バッシングの心配



も」。①貿易インバランス②財政赤字③地域経済問題(農業、石油)を混同して議論すべきでなく、「我々はこの点で皆さんから、忍耐を学ば

なくてはならない」。が、これは本来の米国人の気質とは異なるものでもあるので、日本側も対応に配慮を、ときわめて穏当である。「二〇月三日(木) 記者会見「日米關係」シリーズ(X) 司会 友田規委員 通訳 宇尾真理子 出席 二三人」

M・R・J・ゲスト 在日英国大使館商務参事官/R・V・ピアス 在日英商業會議所 会頭

英企業の日本市場参入と問題点について話を聞いた。サッチャー政権下での英国経済の復興と円高メリットで、対日輸出二五%増(前期比)を越える勢いとなって、出だしは抑えた発言が目立った。が、終盤近くなるに従い、本音をズバズバ。国際基準にそぐわない許認可・テスト、ガット第三条違反で提訴中の酒税、そして日米二国間での経済協議に対して

も不満をあらわにした。外車の並行輸入や代理店のマージンをめぐって、会場とも活発な意見のやりとりが行われた。「二〇月二七日(火) 研究会 司会 佐野真委員 通訳 塩見和子 出席 三六人」



石川六郎 鹿島建設会長



主に経営の立場から「地価問題」のほぼ全てに言及した。八月に実施した東商会員への「地価アンケート」の結果を紹介し、「ビル、住宅とも建設ラッシュで、マクロ的にみればかぎり、内需拡大にもプラスで、悪影響なしとも言える」「担保価値の上昇で債務返済が容易になっているが、固定資産税、相続税負担の問題が浮上、土地を持っているところと持たないところの格差が拡大している」。

供給対策としての臨海部開発で、都心との接続に考えられている環状2号線については、「困難であろう」との見通しを。関連して「地下の深いところに放射状に高速道路網をつくり、都心三区集中を排すべし」とのアイデアを示した。

質問に答え、関西新国際空港建設工事への米企業参加問題について、「不幸なこと事態と離れて政治問題化してしまつた。米国の建設会社でやりたいところは一社もない。最近では資材、機械、レーダーシステムの売り込みに変化してきているようだが……」。【二〇月三九日(木) 研究会「土地を考える」(Ⅲ) 司会 広瀬一郎委員 出席 四五人】 (支)

プロファイル

◇個人D会員

○囲碁の会

十月二十四日(土)例会日、やっぱり朝から雨。それでも参加者は十九人、総対局数四十六局。

浅野道彦四段は五連勝で最近の通算成績が・八〇〇、規定により五段に。山根耕志五段、川本和孝三段がともに四連勝。

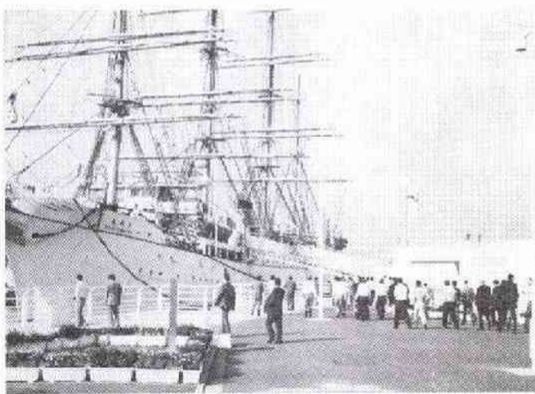
堀川敏雄五段と河田稷四段もまた優秀な成績でした。なお、山崎政人四段がすでに先月までの通算成績・八二三で五段昇段を果たしていることが判明。世話人の怠慢につき深くお詫びの上公示いたします。

次回は十一月二十一日(土)。十二月二十六日は第六回大軒杯争奪戦です。

「みなとみらい21」見学会

(10月2日(金)
参加1182人)

六月に行った「東京港見学会」に続いて、横浜港周辺の開発計画「みなとみらい21」を見学した。



日本丸を中心としたメモリアルパーク

同計画は横浜駅東口と関内地区にはさまれた一八六ヘクタールに、一九万人が働き一万人が住む町づくりを目指している。すでに中央地区の埋め立て作業の七割が終わり、六十四年開催の横浜博に向けて、基盤工事が進められている。

計画の最終的な完成は二〇〇〇年になる。全体をビジネス、ショッピング、インターナショナル、ウォーターフロントなどの六つのゾーンに分け、国際会議場、横浜市美術館、日本丸メモリアルパークなどが作られる。首都高や湾岸道路との連絡や、みなとみらい21線(東神奈川―元町間)の敷設など、交通網の整備も含めた遠大な計画である。

当日は若竹馨企画部長(みなとみらい21第三セクター)のブリーフィングの後、日本丸を見学、バスで工事地区を見た後、山下公園からシーバスに乗り、海上から事業地区を視察した。

紹介 会合

- 1日▽新聞協会報座談会「今、テレビ報道を考える」玉井賢二NHK報道局長、志甫博TBS報道局長、清原武彦サンケイ編集局長、佐藤清
- 2日▽第十一回フォーリン・プレスセンター創立記念パーティー（河村欣二会員）3日▽科学部三十周年パーティー（朝日 長沢光男会員）▽民放大会特集座談会「民間放送の現状と展望」作家 橋田壽賀子、志賀信夫放送評論家、山本秀上智大教授、野崎茂民放送研究所長（山形新 堀田稔会員）▽全国新聞社出版協議会・懇親会（共同 藤井寛会員）5日▽第四回全日本トライアスロン宮古島大会記者会見（琉球 真喜屋明会員）6日▽千葉雄次郎先生の卒寿を祝う会（内川芳美会員）▽勉強会「動物と人の腸内細菌について」光岡知足東大教授（共同 松本克美会員）7日▽藤本有典氏を偲ぶ同朋会（時事 原野和夫会員）▽新聞法制研究会（協会 田村進会員）8日▽デニス・ヤウ香港貿易發展局駐日代表記者懇談会（国際PR 三浦孝会員）▽入社試験（水産経済 沢木成美会員）
- 9日▽経緯塾講座「世界情勢と日本」法眼晋作、広中平祐氏ほか（宮崎吉政会員）▽銀杏クラブ「帝國大学新聞」編集部OBの集い（殿木圭一会員）12日▽欧州記者研修計画歓迎レセプション（協会 宝子山幸充会員）▽九州五社会（長崎 中野広会員）13日▽東京外語ロシア会（甲斐原文夫会員）▽第十四回海外日系新聞協議会年次大会（青木友二会員）14日▽山田武志諏訪CATV社長を祝う会（朝日 小笠原竜三会員）15日▽コカコーラ・カンパニー ロベルト・ゴイズエタ会長、ドナルド・テイオ社長記者会見（日本コカコーラ 三浦憲一会員）16日▽南西アジア記者一行お別れ会（安延久夫会員）19日▽「医食同源」五周年パーティー（テレビ東京 三神正人会員）20日▽東京写真記者協会デスク会（共同 柳沢良純会員）21日▽'87世界ツーリングカー選手権公式エントリー発表会（フジテレビ 渡辺修会員）▽「'87セ・リーグオールスター東西対抗」記者発表（中国 門原卓会員）22日▽全国支局長会議（時事 本多徳正会員）▽狭川宗玄東大寺管長の就任を祝う会（奈良 中川雅裕会員）

（会員がクラブ施設を利用して行った主な会合です。十月の総回数は一四三回でした）

第五十回記念ゴルフ会

池浦会員（OB）が優勝

十月二十三日、山梨県都留CCで第五十回ゴルフ会が開催されました。参加者は二十七人。秋晴れの中、好スコアが続出し、NET3アンダーの優勝となりました。

優勝池浦正彦氏（D）69、2位浅野修氏（新聞協会）71、3位小林茂氏（山梨日H）73、BB楠田正夫氏。

クラブ発足と同時に故前田雄二初代事務局長の発案でスタートしたゴルフ会も、十七年を経て五十回を数えることになりました。当初は十人前後の参加者で

ホームコースで初優勝

幸運にも十月の日本記者クラブゴルフ



「少し、後ろめたいんですが」

したが、近年、会員の増加とともに参加者も増え、多いときは四十人を越えるような盛況です。

会では五十回を記念してネームプレートを作成し、当日の参加者や賞品をご寄贈いただいた方々に配布しました。ゴルフ場側も、記念すべき会の開催場所選ばれたことを大変に喜んでくれて、社長さんも一緒にプレーに加わり、五十回を祝う配慮をいろいろといただきました。次回は来春四月七日（木）相模CCの予定です。

会で優勝することができました。それも第五十回という節目の大会でしたので、喜びもひとしおでした。

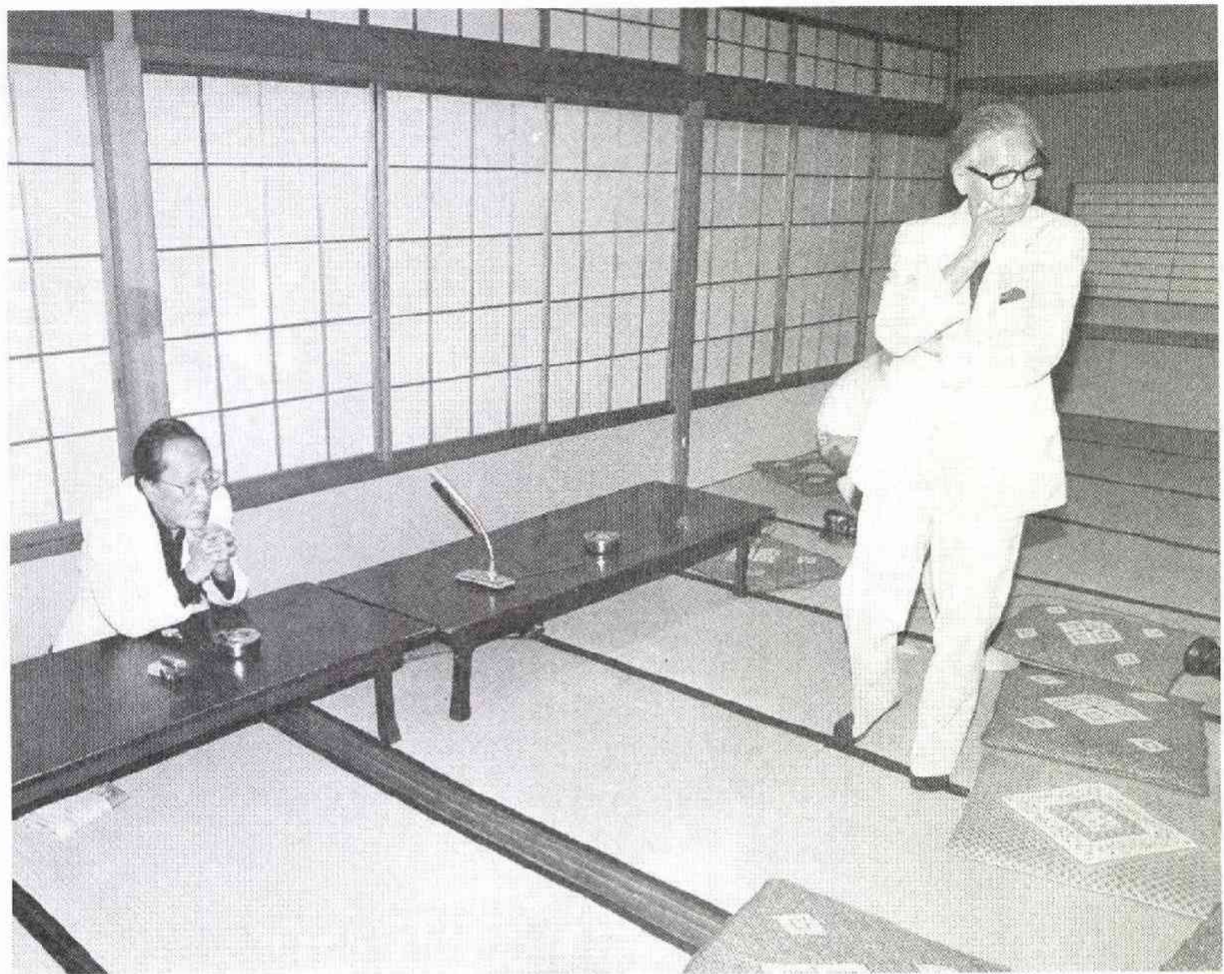
天候は暑からず寒からず、コース・コンディションはよく、パートナーにも恵まれるという三拍子がそろったせいも、平素よりもショットが良く、珍しくスコアもまとまりました。勝因は肩の力を抜き、ゆったりとしたスイングを心掛けたことかな、と考えたりしています。

ただホームコースという地の利が幸いしたことは否めず、「おめでとう」と言われてもちょっぴり後めたい思いました。

（池浦 正彦）

写真部

写真 鈴木竜三 (読売新聞社 写真部)



新国劇 70年の幕閉じる

この写真を撮ったカメラマンは昭和三十九年生まれ、新国劇を知らない。解散の記者会見に出た島田正吾、辰巳柳太郎の両代表はいずれも明治三十八年(一九〇五)生まれの八十二歳だ。

大正六年(一九一七)、沢正こと沢田正二郎が、歌舞伎と新劇の間をねらった新しい国民演劇を旗印に劇団「新国劇」を結成したのは、彼が二十五歳の時だった。それから七十年、多くの名作舞台を生んできたが、とうとう時勢に勝てず、九月七日浜町会館での解散声明で幕を閉じた。極め付けは「国定忠治」「月形半平太」、中里介山「大菩薩峠」の机竜之助。

昭和四年カゼと中耳炎がもとで沢田が没した後、性格の対照的な島田、辰巳の二人が柱となった。経営に苦しみながらも、「関の弥太っぺ」「駿の母」「一本刀土俵入」ら長谷川伸もの。宇野信夫脚色「宮本武蔵」、現代劇で北条秀司の「王将」、尾崎士郎「人生劇場」と、男々の心をうったえた。

よくぞここまで。一つ一つの思い出にふけっているのでしょうか。記者会見が終わってもしばし去りやらぬ二人の名優。カメラマンは畏敬の念をこめてシャッターを押した。最後の舞台に静かな拍手が聞こえてくるようだ。(深谷憲一)

マスコットの「伝書バト」君が出向中です



十月一日、熊本日日新聞社の「新聞博物館」(三階建て、延べ床面積千二百平方メートル)がオープンしました。創立四十五周年を記念して建設したものです。わが国に二台しかない木製のグーテンベルク印刷機(複製)はじめ、歴史を刻んできた

種々の新聞製作機器のほか、新聞界の先駆者の遺品、遺墨などの展示センターを主体に、NIE(教育に新聞を)運動の拠点となる教育センター、図書館を併設しています。

号外の時のチリンチリンの鈴などの展示とともに、昭和三十年代まで共同通信で連絡用に使われていた、当クラブのマスコットの伝書バトのはく製も、一役買って人気を集めているとのこと。(写真)

こちらも「一本」にはまとまらず
安竹宮のネクタイの好み

総裁候補として十月初旬記者会見にのぞんだニューリーダー三氏には、記念品として新しいクラブタイを贈りました。三種類の中からお好みの一本を選んでいただきました。トップバッターの宮沢さんは、えんじの細いストライプを、次の竹下さんは紺地に角ドットをちらした一番オーソドックスなものを、そして安倍さんはやや派手目の紺地のレジメンタル・ストライプをご希望でした。

六十年晩秋の「三者そろい踏み」の時も、旧クラブタイの中から、宮沢さんがえんじストライプ、竹下さんがグレー無地、安倍さんがグレーストライプと三者三様でした。意外に宮沢さんは「えんじ好み」で、竹下さんはいつも無難で一番地味なものを、安倍さんはモダンな感じのものがお好きなようです。

昼食会チケットは出来るだけ

前日までに精算願います

昼食会のたびに九階の受付が大変混雑します。チケットを電話で予約し、当日直前に精算される方が増加しているためです。極力、チケットの精算は前日までにお願いたします。チケットをお求めになった後、都合が悪くなった場合も、当日一時間前までにお電話いただければ代金はチケットと交換でお返ししております。

当日の混雑緩和にご協力願います。なお、昼食会開催日の正午前は、チケット精算される方々が殺到いたしますので、会合へのお申し込みなどほかのご用は出来るだけ昼食会終了後にお申しつけ願います。

クラブ訪問者

十月七日 ポール・イグナチエフ 国連広報センター所

長兼ユニセフ駐日代表 十月八日 村角泰、石井亭外務省新旧儀典長

計報 森田善之助会員(個人D)が九月二十四日肺がんのため逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

十一月一日現在の会員状況 法人会員 一四三社 基
本会員 六一六人 個人会員 一、三八五人 法人・
個人賛助会員 七五社 二三七人 特別賛助会員 七
四人 名誉会員 一六人 計 二一八社 二、三二八人

十一月の行事(6日現在)

- 19日(木) 午後2時~3時30分 アーモンド・ハマー オクシデンタル石油会長会見
- 20日(金) 午後4時~5時 リー・ヒューブナー インターナショナル・ヘラルド・トリビューン社長を囲む会
- 24日(火) 正午~午後1時30分 ファン・アントニオ・サマランチIOC会長昼食会
- 25日(水) 午後2時~3時 リー・シェンロン シンガポール商工相記者会見
- 27日(金) 正午~午後2時 堅山利文全労連会 長昼食会

会員の著書

経済がわかる本 今 静行
(ダイヤモンド社 一、〇〇〇円)
元気の出る経済学 久水宏之
(時事通信社 一、〇〇〇円)
ご忠贈いただきました ラウンジの書棚にあります

会報委員長 深川 誠

委員 林 利隆 三好崇一 松井 章 東郷茂彦
連絡 長谷川 河野(事務局) 五〇三一二七二二